

日本列島病院探訪



全国の特徴ある病院取材する『フォルテ』



Interviewee
理事長
近藤 英輔
Eisuke Kondo

“FORTE”



社会医療法人 北晨会

恵み野病院

Hokushinkai Megumino Hospital

Interview_ ドクターズマガジン編集部

Text_ 佐藤恵 Photograph_ 緒方一貴

051

病院探訪
北海道編



優れた人材により治療成績を向上させ 人口増の医療圏で急性期医療に精力を注ぐ

北 北海道の空の玄関口・千歳市と、最北の政令指定都市・札幌市の間に位置する恵庭市。2023年のエスコンフィールドHOKKAIDOの開業以降、半導体産業の進出やそれに伴う物流拠点の新設、食品メーカーの新工場建設などが決まり、恵庭エリアの人口は継続的に増加している。

社会医療法人北晨会恵み野病院は、恵庭市を中心に隣接する北広島市や千歳市もカバーしており(22、23万人が対象)、地域住民が杖柱と頼る二次救急医療機関だ。1986年に120床、医師5人で開院し、地域密着型の病院として救急医療と地域医療に従事してきた。1990年に医療法人の認可が下り、クリニックや訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターを次々と新設し、在宅復帰の道づくりにも余念がない。現在は、恵庭市内で最も多い13診療科・199床を備えている。

2020年、北晨会の理事長に就任以来、社会医療法人化の実現、高度医療の実践、新診療科の開設など、さまざまな改革に取り組んできた近藤英輔氏に、躍進の秘訣を伺った。



美しい庭のようなおまけ
北海道・恵庭市

“FORTE,”

社会医療法人 北晨会

恵み野病院

Hokushinkai Megumino Hospital

高度医療の実践で“治せる”病院に 士気も上がり離職者が減少

北海道大学病院の小児科に在籍していた近藤氏が、母が理事長を務める北晨会恵み野病院に帰院したのは2017年。その4年後の2021年、一族経営から脱却すべく社会医療法人化を実現したのは近藤氏の英断だった。

「地域に根差した病院として、真の社会貢献を果たすためには社会医療法人化が不可欠でした。使命のようなものに突き動かされたのだと思います」

同院が位置する二次医療圏に、市立病院は千歳市民病院の1施設しかない。そのため、同院は20万人を超える地域住民の期待を双肩に担っている。

「今後も人口増加が見込まれる地域なので、急性期医療のニーズは大きい。救急車の受け入れ台数は、昨年在約1700台で今年は2000台を優に超えるペース。千歳市民病院の受け入れ数を追い越す勢いです」

追い風になった取り組みの一つが、脳血管内治療だ。2024年にカテーテルによる脳血管内治療の専門医である内田和希氏が脳神経外科の常勤医として着



任し、同時に副院長に就任。着任1カ月前には二列の血管造影装置に更新し、ハード面も整えた。今年7月には専門医がもう一人増え、現在は5人体制だ。

「医療圏内で脳血管内治療が一番強いのは、間違いなく当院です。脳梗塞、脳出血の患者さんは、これまで札幌に転送していました。が、当院で治療ができるようになりました。脳血管内治療の症例数は、前年比で2倍です」

また、循環器内科では、急性心筋梗塞の血管内治療と不整脈アブレーション治療を強化しており、心臓カテーテルの治療件数は北海道内でも上位の実績を誇る。もう一つの特徴としては、心臓リハビリテーションへの注力が挙げられる。心臓リハビリテーションとは、心臓疾患を持つ患者の社会復帰および再発防止のための運動療法や生活指導のこ



hinotori™を導入し、チームを結成

hinotori™導入によりさらに低侵襲で安全な医療提供が可能になった。国産機器のため、不具合の調整のフィードバックが早いのも特徴。医師（泌尿器科、麻酔科）、手術室看護師、臨床工学技士からなる、hinotori チームをつくり、技術向上のため積極的に研鑽を積んでいる。

勢

「当院を漢字一文字で表すと」

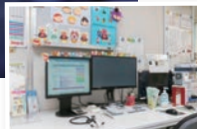
現場の意識改革や医師の若返りが進み、入院実績・救急実績ともに非常に伸びています。今後、新病院建設など事業拡大も計画しており、勢いのある病院です。

理事長 近藤 英輔



恵庭市で唯一の小児入院医療を行う

近藤氏の専門である小児科は、近藤氏の入職によって外来患者が3倍に増加。恵庭市には自衛隊基地があるため若い世代が多く、子どもの数も多い。外来に加え、入院治療も可能。



とで、近年は国としても推奨している。

「循環器内科の医師が、病院敷地内で患者さんと畑を耕したりしています。医師自ら心臓リハを行う施設は、なかなかないと思います」

さらに同院の医療レベルを格段に上げたのは、国産初の手術支援ロボット「hinotori」だ。2024年9月に道内の民間医療機関で2番目の導入を果たし、12月に泌尿器科で第一症例（前立腺がん）の手術を行った。以降、腎臓がんも含めて症例数が増加し、今年4月からの保険適応の拡大により年間40〜50症例の見込みに達しているという。

「現在は泌尿器科がメインで使用していますが、今後は消化器外科でも活用していきたいと思っています」

院内では「hinotori チーム」が立ち上がり、勉強会を開いたり大学へ見学に行ったりするなど術者たちが自主的にレベルアップを図っている。血管内治療の体制強化とhinotori™導入による医療レベルの向上により、地域医療への貢献度が上がったことは言うまでもないが、同院全体にも好影響を及ぼしているという。

「これまで他院に治療をお願いしていた患者さんが当院で元気になるのを見て、『自分たちでこんなに治せるんだ』とスタッフの士気が上がりました。仕事のモチベーションアップに直結し、離職者の減少にもつながりました」

この波に乗り、働き方改革にも積極的に取り組んでいる。事業所内保育所の新設や、福利厚生を手厚くするなど、北農会の

消化器内科・新設の耳鼻科は地域トップの症例数

持っている。

近藤氏が「当院の看板」と胸を張るのが、消化器内科だ。今年4月に院長に就任した三浦洋輔氏が率いる同科は、内視鏡による治療実績が道内トップクラス。院長自ら、1病棟約50人の患者を受け

理念にある言葉「やさしさと温もり」は、患者はもとよりスタッフにも及んでいる。

「福利厚生の一つとして、エスコンフィールドで行われる日ハム戦の年間シートを4席購入しています。働きがいのある職場を目指して、福利厚生の充実や働き方改革にも取り組んでいきたいと思っています」

「プレイヤーとしての実力と信頼は折り紙つき。消化器内科の医師は院長含め2人ですが、指導医としても大変優秀な先生方です。若手医師が学ぶ場としても大変充実しています」

恵み野病院が地域で存在感を強めたのは、優秀な医師を集められたことに起因する。脳血管内治療の専門医が常勤として赴任したことは先に述べた通りだが、整形外科でも札幌医科大学から専門医を招聘した。

「膝関節が専門で整形外科全般に対応できる医師を含めた2人の常勤医体制になったことで、外傷などの救急搬送も受けられるようになりました。来年は、札幌医大から一人増員されるかもしれません」

近藤氏が理事長に就任してから立ち上げた耳鼻咽喉科には、

北農会グループの連携

恵み野病院を中心とし、同院付属恵庭クリニック、在宅向けサービスを担う恵み野訪問看護ステーション「はあと」、恵み野看護小規模多機能居宅介護「はあとの家」、恵み野居宅介護支援事業所、介護施設「恵み野ケアサポート」、サービス付き高齢者向け住宅「シャロームめぐみの」が連携し、急性期から回復期、在宅医療まで一貫通貫のサービスを提供する。



Hospital Data ※2024年度

▼救急搬送件数	▼脳血管内カテーテル治療実績	▼指定救急	▼病床数	▼診療科数	▼医師数
約 1700 件/年	約 50 件/年	2 次救急	199 床	13 科	35 人

※2025年9月 現在



エスコンフィールド HOKKAIDO で

野球観戦

福利厚生の一つとして、毎年、日ハム戦の年間シートを4席購入。職員同士や家族で観戦ができる。

旭川医科大学から2人の医師が派遣され、甲状腺や副鼻腔炎の手術で腕を振るっている。

「毎週手術を行っているので、症例数はこの地域でトップです。『自身が中心となって診療科を盛り立てていきたい』と意気込んで来てくださった医師たちばかりなので、本当に良いメンバーがそろったなと思います」

全国の患者数が55.2万人を超える糖尿病を専門とする糖尿病内科は、常勤医が4人体制で対応している。道内でこれほど充実した人員体制はあまりないだろう。糖尿病に限らず総合内科医としての役割も担っており、人口増が見込まれる地域に安心感を生み出している。

実力と人柄を備えた人材を集められたのは、大学医局と良好な関係を築く近藤氏の手腕に負うところが大きい。加えて近藤氏は、チームビルディングの観点から院内の組織改編にも取り組んだ。ベンチマークしたのは、地元球団・北海道日本ハムファイターズの新庄剛志監督だ。

「新庄監督の大胆な『新陳代謝』は、チームプレーのためのマネジメントとして正しいと思っています。私も、チーム医療を円滑に

進めるための人事改革や若手医師の育成に力を注いできました」

外科手術が年間400件に上る同院は、「今」を見ていない。22万人が23万人、24万人と増える「未来」を見据えているのだ。「持続可能」のその先、「持続拡大可能」な病院になるべく布石を打った結果が、数字に表れ始めている。

少人数・自由度高い研修に定評 今後は急性期拠点機能の指定を目指す

そんな恵み野病院は研修施設としても人気があり、ここ数年フルマツチを達成している。外来1日平均455人、入院1日平均150人といった症例数の多さに加え、マンツーマンでのきめ細かな指導、診療科の垣根が低く、医師同士の交流が活発なことなどがその理由だと近藤氏は分析する。

「少人数指導であること、また、プライマリ・ケアの経験が十分に積み、大学病院でも最大24週間で研修ができるという自由度の高さにも魅力を感じて、道外からも希望者が来てくださいます」救急や当直では研修医がファ-

ストタッチを担当することで、実践的な力が身に付けられるのも同院の特徴だ。また、linotrimのシミュレーターを導入しており、研修医には積極的に活用してほしいと近藤氏は言う。

「これからの時代は、ロボット手術の技術が不可欠です。外科志望の研修医の皆さんにはぜひ、たくさん使っていただいて早くから慣れてもらいたいですね」

全国から、「ここで学びたい」という研修医が増えている同院は、地域医療へのさらなる貢献の道を模索すべく、医師の派遣にも力を入れている。

「現在は、20kmほど離れた由仁町立診療所に循環器内科医を派遣し、安平町にあるへき地診療所に整形外科医と小児科医を定期的に派遣しています。当院では幸い医師が増えていますので、基幹病院としての使命を果たしていきたい」

近藤氏の目下の目標は「急性期拠点機能」の指定を受けることである。現在、2040年までを見据えた「新たな地域医療構想」の一環として二次医療圏では新たに「医療機関機能」の報告を求める方向で議論が進められている。その中の一つである「急

性期拠点機能」の指定は、医療従事者と医療の質を確保すべく急性期医療を集約するのが目的だ。

「それに伴って診療報酬も変わると思いますが、経営的にも重要ですが、やはりこの地域の方たちに『困ったら恵み野に行く』という安心感を持ってもらいたい。救急車の受け入れ台数や手術件数の増加、診療科の整備など、今後ますます体制づくりを盤石にしていきたいと考えています」

人口増に伴う医療需要の増加を見据え、医師を増やすとともに高度医療に取り組み、着実に成果を上げている同院。「地域の命を守るのは自分たちだと自負しています」と、近藤氏からは熱い言葉が漏れた。

「近年、地域の皆さんから、より一層必要とされていることをひしひしと感じます。当院にはやる気に満ちた医師やスタッフが集まり、ベストなチームができつつあります。目標に向けて病院一丸となってまい進したいと思います」

今回、探訪した病院

社会医療法人 北農会
恵み野病院

〒061-1395
北海道恵庭市恵み野西
2丁目3-5

